

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00630

研究課題名（和文）福祉言語史の基礎資料としての近代日本語点字資料の調査と整備

研究課題名（英文）Research and maintenance of modern Japanese Braille materials as basic materials for the history of welfare language

研究代表者

諸星 美智直（MOROHOSHI, Michinao）

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：00220111

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：近代日本の視覚障害者教育史の主要な資料である近代日本語点字資料のうちでも貴重な用例の多い筑波大学附属視覚特別支援学校所蔵の点字雑誌『むつぼしのひかり』を中心的資料として、目視によって点字の凹凸が確認できる画像データ化のために目録を作成して資料の状況を確認し、専門技術を有する業者を選定して『むつぼしのひかり』の91号以降の号として明治期、及び一部大正・昭和期の号を撮影し電子媒体による保存処置を講じ、点字雑誌に見られる教育・学術用語などの漢字音・外来語の表記、ことに合拗音の状況、また掲載された講演における「であります」などの文体・語彙・語法、音便の特徴などについて検討を加えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は近代点字資料が視覚障害者教育史の貴重な資料であると同時に歴史的仮名遣いによる漢字仮名混じり表記と異なり6点字によってほぼ表音式で表記されているため、近代共通語成立期における日本語を音韻・語彙・語法・表記・方言にわたって分析できる資料であることを指摘したことである。さらに触読文字であるため点字の摩滅の恐れがあり、また紙の劣化の恐れもある筑波大学附属視覚特別支援学校所蔵の点字雑誌『むつぼしのひかり』を目視によって点字の凹凸が確認できる画像データのための写真撮影を91号以降の号として明治期及び一部大正・昭和期について行い電子媒体による保存処置を講じたところに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Visually, the Braille magazine "Mutsuboshi no Hikari" owned by the University of Tsukuba School for the Visually Impaired, which is a valuable modern Japanese Braille material that is a major source of the history of education for the visually impaired in modern Japan, is used as a central material. In order to convert the irregularities of the Braille characters into image data, we created a catalog, checked the status of the materials, selected a company with specialized technology, and created a catalog of images from the 91st issue of "Mutsuboshi no Hikari" onwards, mainly from the Meiji period and Some of the issues from the Taisho and Showa periods were photographed and preserved in electronic media, and the notation of kanji sounds and foreign words such as educational and academic terms found in Braille magazines, especially the status of combined sounds, and lectures published. We examined the writing style, vocabulary, usage, and tone characteristics of the text.

研究分野：日本近代語

キーワード：近代点字資料 点字雑誌 むつぼしのひかり 近代日本語 学術用語 外来語

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近代点字資料は視覚障害者教育史の貴重な資料であると同時に近代共通語成立期における近代語の研究資料としても極めて有益であるにも関わらず、墨字で印刷し膨大な冊数が発行された言語資料とは異なり、視覚障害者を対象として点字で作成されたため現存する分量が限られ、また点字の摩滅や用紙の劣化などにより資料価値の検討とともに保存措置が必要とされていた。

### 2. 研究の目的

近代点字資料は歴史的仮名遣いによる漢字仮名混じり表記の墨字で印刷された言語資料とは異なり、6点点字によってほぼ表音式で表記されているため、近代共通語成立期における日本語を音韻・語彙・語法・表記・方言にわたって分析することができる貴重な言語情報を有する資料である。そこで資料の画像データ化によって保存措置を講じた上でこれを近代共通語成立期の言語資料としての性格を分析することを目的とした。

### 3. 研究の方法

近代点字資料のなかでも特に障害者教育史の研究に有益で意義があり、言語資料としても学術講演・論文から韻文作品にいたる多様な内容によって豊富な語彙の見られる筑波大学附属視覚特別支援学校資料室所蔵の点字雑誌『むつぼしのひかり』(明治36年6月創刊)のうち、平成27年～29年度の日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(C)によって調査・撮影した範囲に続けて、明治期の90号以降で紙質の状態などから調査・撮影の可能な号、および一部の大正・昭和期で可能な範囲の号について専門業者により調査・撮影して、目視で点字の凹凸の識別が可能な鮮明な画像データ化を行った。このデータをもとに言語資料としての分析を行った。

### 4. 研究成果

本研究課題の成果については、なによりも、近代点字雑誌として貴重な価値を有する筑波大学附属視覚特別支援学校資料室所蔵の点字雑誌『むつぼしのひかり』の明治期、および大正・昭和期に発行された号を可能な範囲で撮影し、目視で点字の凹凸の識別が可能な鮮明な画像データを作成して保存措置を講じたことが挙げられる。

その上でこの画像データを使用して『むつぼしのひかり』の近代共通語成立史上における言語資料としての特質を解明したことは、従来の近代日本語研究において研究資料として使用されることがほとんどなかっただけに近代日本語研究の新分野を開拓した研究であると位置づけることができると考えられる。

この『むつぼしのひかり』が言語研究の資料としても極めて大きな価値を有する文献であることについて、具体的に第107号(大正元年10月発行)に所収の医学博士三宅秀(1848-1938)の口語体の「論説」の「しんあん きょうーじゅほーに ついて」を例に言語資料としての特徴を示すと以下ようになる。

#### (1) 音韻・表記について、

『むつぼしのひかり』が点字による表音式仮名遣いであるところからほぼ発音通りの語形が確認できる。点字の仮名遣いの変遷、また、『むつぼしのひかり』における明治期の仮名遣いの特徴についてはなかのまき(2015)および諸星美智直・伊藤孝行・中野真樹(2019)に収めるなかの・まきの考察があるが、大正・昭和期の『むつぼしのひかり』の仮名遣いの変遷については今回得られた画像データをもとに今後の課題としたい。以下、用例を挙げるにあたっては点字による表記をそのまま「ひらがな」表記に変換して示す。

合拗音については漢字音の移入とともに日本語に定着したがやがて直音化が進み近代にはすでに国語調査委員会編(1905)『音韻調査報告書』および同(1906)『音韻分布図』にあるように府県によって回答の精粗の問題はあるものの東京をはじめ多くの地域で直音化が報告されているが、明治政府に採用された歴史的仮名遣いを含められて公的文書に用いられていたが、表音式を基本とする点字において合拗音と直音のいずれを用いているかは注目されることである。『むつぼしのひかり』109号には、目次に、

げかてき しっくわんの まっさーじに ついて(107号目次)

の例が見られる。「しっくわん」は「疾患」なので合拗音が点字で表記された例であるといえるが、一方で、

たいしょー がんねん 10がつ 28にち はっこー(107号1頁)

の「がんねん」は「元年」なので、合拗音で「ぐわんねん」とはせず直音の点字で表記した例である。これに対して、

20ぷんか 30ぷんの あいだの せじゅつで こーくわの りょーじだいを もらい  
ますと いうと(107号2頁)

の「こーくわ」では「高価」であるとすれば歴史的仮名遣いでは直音を用いた「かうか」なので違例であるといえる。

また、「日本」という語は、漢字表記のみの場合は読みを確定しがたいが、点字では仮名表記

と同様に個々の用例の読み(口述筆記であれば発話者の発音が確認できる場合も考えられる)が確定できる。三宅秀の「しんあん きょうーじゅほーに ついて」には、

それから ふつーの にっぼん あんまじゅつの がわに いたしますと(107号1頁)

ひきつづきて いあんてきの にほん あんまじゅつを するが よろしい(107号2頁)のように「にっぼん」と「にほん」の2通りの点字が見られる。

(2) 語彙・語法について

三宅秀の「しんあん きょうーじゅほーに ついて」は口語体であるため、当期の口語における語彙・語法の特徴が見られるが、学術的内容を点字で表音式に表記しているだけに語形の確定できる貴重な資料であるといえる。

まず、文体については、

これわ 1ぼーを りょーびょーてき あんまとして くべつ するからで あります

(107号1頁)

わたくしども もし りょーじを してもらうにわ いあんてきの あんまで あります

から なるべく ちょーじかんを ついやしたほーが びょーじゃのぶりょーをなくさめ

(107号2頁)

それよりわ こんにち せいよー あんまし しょーする まさつじわ すでに ここま

で すすんで おるのであります(107号3頁)

のようにデアリマス体が基調となっているが、中には、

あんまの ほーが 1ばん よろしい だろーと おもう(107号2頁)

とくいさきに きらわるる とーに なったら じつに ゆゆしき だいじで ある(107号3頁)

の「だろー」「である」も見られる。

丁寧の助動詞「ます」には、

がくこーで おしえまするにも ふつーの あんまじゅつに とりましてわ あまり け

いけつに にどの ひつよーわ ないだろーと おもふ(107号3頁)

そのよわ もっぱら いじゅつの ほーを すすめて おいたら よかろーと おもいま

す ただ わたしが しんぱいしまするわ しんじるでも あんまでも ぎじゅつを 3

ねんでも 4ねんでも かかって はやくから たんれんを さけよーと ゆーのに ひ

との かたこしを もむことが できないよーでわ こまる(107号4頁)

のように近世期以来、終止連体形の「まする」が漸減して「ます」が隆盛になるなかで近代の大正期にもなお「まする」が使用されている例であるといえる。古態的な形式としては、他にも、前掲例に見える「きらわるる」の「るる」は受身の助動詞の二段活用が一段化せずになお用いられた例である。

一方で、前掲例に見える「もむことが できない」および、

あんまの ふえを ふいて ながしに だることわ できぬと ゆーて きょーじゅじょ

はなはだ ふつごーだと(107号4頁)

などのスルコトガデキル型の可能表現が見られる。近世後期に僅かに用いられて明治期に盛んに使用されるようになった近代共通語の代表的な複合辞的表現である。可能表現を研究する際には可能の助動詞の上接語のラ行五段動詞が墨字で漢字のみ表記された場合に語形が特定できず可能動詞と区別できない例があるが、点字資料の場合にはそのような問題なく分析することができる。また、否定の助動詞「ぬ」は近代語の資料の中では「ん」と発音された可能性が否めない例もあるが、点字資料の場合は識別が容易である。

以上のように点字雑誌『むつぼしのひかり』をはじめとする近代点字資料は、近代日本語の研究資料として極めて有益であり、今後の日本語研究の新分野であるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 伊藤孝行	4. 巻 62
2. 論文標題 テキストアナリシスによる『むつぼしのひかり墨字訳第1集～第4集』のことば	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 國學院大學紀要	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伊藤孝行
2. 発表標題 テキストアナリシスによる『むつぼしのひかり』第1集のことば
3. 学会等名 日本語学会秋季大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 諸星美智直・伊藤孝行・中野真樹	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ヨシミ工産（印刷）	5. 総ページ数 91
3. 書名 近代日本語資料としての点字雑誌『むつぼしのひかり』（大正・昭和期）福祉言語史の基礎資料としての近代日本語点字資料の調査と整備（課題番号：19K00630）令和元～3年度日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究（C）研究成果報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究 分 担 者	伊藤 孝行  (ITO TAKAYUKI)  (00588478)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授    (10101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中野 真樹  (NAKANO MAKI)  (30569778)	足利短期大学・その他部局等・准教授    (42205)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関